

〔古事記傳^{十七}〕此一書上には赤女と云て下に口女といへるはいかに、初に赤女とあるは、口女を寫誤れるにや、また亦云口女云々の注も心得ず、こは一本にかくありしを、後人の注せるにや

〔年々隨筆^三〕魚は何よりも鯛よろし、神代紀に、赤女比有口疾云々、注に赤女鯛魚名也、^{○中}日本紀のおもても、まづはたひの事とみえたれば、御饌にたてまつらぬにやあらん、かうたぐひなぐうまきもの、くちをしき契なりけり、まかれども御元服の理髪の大[○]臣千鯛を奉る事あり、今もつねに奉るとき、かたぐいぶかしき事也、こゝに正明おもふ事あり、尾張國知多郡の浦々、篠島ひまり島などにてとる魚に、ヂンメ、ヂンナメ、アイナメ、アカメ、クヂメなどめといふ魚なほ多かり、これらみな藻魚の種類にて、たひよりは味淡く毒なき小魚ども也、^{○中}そのアカメは赤もどこともいふ、紅色にて三四五寸ばかりあり、江戸にても常みる物也、クヂメは淡黒色なり、くろもどこともいふ、赤女と口女とは鯛と黒だひのごとし、さて又一種今やがて赤鯛ともいひ、又めだひともいふ物有、^{○中}これすなはち赤女の小品にて、味淡く藻魚の屬なり、鯛の種類にはあらず、その口の大きにひろされるは、かい探られし故にもやあらんは、かなき方言を據にすなれど、やがてあかだひといふ事もあると、めだひと鯛女とかよひてきこゆると、赤女がその小品なると、口女がその種類なると、かたぐいよしありげなり、さて又書にみえたる名字どもをとかば、赤女とあるは、女は藻魚島物といへる數品を撮ねたる種類の名、その中に一種ことに色あかき故の名にて、すなはちめだひをさしていへる也、^{○中}大小品かゝるべし、口女は同種類ゆるまされたるつたへ、鯛女は鯛に似たる女といふ事とみですべてよくかなひたり、^{○下}

〔日本書紀^二神代〕一書曰、海神召赤女、口女、^{○中}赤女即赤鯛也、口女即鰯魚也、